

形而上学的必然性の真理メーカー意味論による分析

坪井祥吾 (Shogo Tsuboi)

一橋大学

命題は、ただ単に真であったり偽であったりするだけでなく、たまたま真であったり、真であることが必然であったりもする。例えば、「今日、東京で雨が降っている」という命題が真であることはたまたまである（晴れであったこともありえた）。一方で、「私は私と同一である」は必然的に真であろう（私が自分自身と同一でないということは想像すらできない）。この種の様相は、命題の真理にかかわるということで真理様相 (alethic modality) とされる。

真理様相には、いわばその「強さ」に程度がある。例えば、「私はジェームズ・ブラウンよりも歌がうまい」という命題は、実際に偽であり、また、何らかの意味で必然的に偽であるように思われる。私よりもジェームズ・ブラウンの方が歌が下手であるということはある程度ありえないと言いたくなる。しかし、これは比較的「弱い」必然性である。この命題が必然的に偽であるように思われるのは、常識的な可能性しか考慮していないからである。ある突飛な状況を考慮すれば、ジェームズ・ブラウンよりも歌のうまい私というのも十分に想定できるはずである。対して、「私は私自身と同一である」という命題の必然性は、これよりも遥かに「強い」ように感じられる。私が自分自身と同一ではないような状況は、それがどれほど突飛であろうと、ありえない。本報告で取り扱うのは、強弱さまじまな真理様相の中で、最も「強い」様相である。これは絶対的な様相 (absolute modality) ないし形而上学的様相 (metaphysical modality) と呼ばれる。先に例示した「私は私自身と同一である」という命題は、形而上学的に必然的な命題の一つである。

様相論理のモデル論に関する Kripke らの仕事以降、形而上学的様相は可能世界 (possible worlds) によって分析されるのが主流だと言ってよいだろう (飯田 2024)。具体的には、A があることが形而上学的に必然的に真であるというのは、全ての可能世界において A が真だということであり、一方で A がたまたま真だというのは、現実世界では A は真だが他のある世界では偽になるということだ、といった具合である。

たしかに、こうした世界ベースの理解も、形而上学的様相の重要な側面を捉えている。A が形而上学的に必然的だということのうちには、どんな状況を想定しても A が成り立っている、ということが含まれている。だが、形而上学的必然性には、別の重要な側面もある。それは、いわば「基本的な」必然性と「派生的な」必然性が区別できる、という側面である（この区別は、本質的には、Fine 1995 による constitutive/consequential の区別と同じである）。派生的な形而上学的必然性ということで私が意図しているのは、他の形而上学的に必然的な真理からの論理的な帰結であることのおかげで成り立つような必然性である。基本的な必然性ということで私が意図しているのは、派生的ではないような必然性である。例えば、先に挙げた「私は私自身と

同一である」は基本的な必然性と言えよう。それは、何か他の必然的真理のおかげで必然的に真なのではなく、それ自体によって必然的に真だと言ふべきだろう。一方で、「私は私自身と同一である、または、今日の東京は雨である」という選言的命題は派生的に必然的な真理となる。というのも、その必然性は、「私は私自身と同一である」という命題が必然的であるおかげで成立するような、派生的なものだからである。

基本的／派生的な必然性の区別は重要である。というのも、哲学的な議論はしばしば何が形而上学的に真であるかを探求するために行われるものであり（つまり、ただ実際に成り立っている真理ではなく、必然的な真理を哲学者は追求する）、かつそこで求められるのは、派生的な必然性ではなく、基本的な必然性だからである。哲学的議論の結論として「私は私自身と同一である」という主張を引き出した後に、そのさらなるコララーとして先の選言的命題をも主張することは馬鹿げているだろう。だが、標準的な可能世界意味論ではこの区別は捉えられない。可能世界意味論では、基本的な必然性と派生的な必然性という二つのカテゴリーは、全ての可能世界における真理という単一のカテゴリーにつぶれてしまうからである。

そこで本報告では、真理メーカー意味論 (truthmaker semantics) を用いて、形而上学的様相に意味論を与えることを目指す。真理メーカー意味論は、「命題の真理は実世界の存在者に根拠づけられる」という哲学的な考えを背景として開発・展開されている形式意味論である (Fine 2017)。真理メーカー意味論は、メレオロジカルな構造を持ったものとして自然に解釈できる数学的構造 (完備束) に基づいたモデルであり、まさにこのメレオロジカルな部分全体関係が、先に述べた形而上学的必然性の特徴を捉えるのに適していると私は考えている。さらに、様相オペレーターの真理メーカー意味論による分析ははまだ発展途中の研究分野であり、本報告は様相オペレーターに対する新たな真理メーカー解釈を提示するという点でもこの分野に貢献できるだろう。

文献

- 飯田隆 (2024) 『増補改訂版 言語哲学大全 III 意味と様相 (下)』勁草書房.
- Fine, Kit. (1995) Ontological Dependence, *Proceedings of the Aristotelian Society*, Vol. 95(1): 269–290.
- Fine, Kit. (2017) Truthmaker Semantics. In *A Companion to the Philosophy of Language* (eds B. Hale, C. Wright and A. Miller).